

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

授業のユニバーサルデザインをめざして：
大阪府立定時制高校の国語科授業実践を振り返る

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2017-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 学 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/7761

授業のユニバーサルデザインをめざして —大阪府立定時制高校の国語科授業 実践を振り返る—

短期大学部准教授 西川 学

1 はじめに 授業のユニバーサルデザインとは

「ユニバーサルデザイン」とは、1985年にアメリカ・ノースカロライナ州立大学のロナルド・メイスが提唱した考え方である。この考え方には、次に示す「ユニバーサルデザインの7原則」がある。

ユニバーサルデザインの7原則 ロナルド・メイス他 (1997)

- 1 公平な利用 (Equitable use)
- 2 利用における柔軟性 (Flexibility in use)
- 3 単純で直感的な利用 (Simple and intuitive)
- 4 認知できる情報 (Perceptible information)
- 5 失敗に対する寛大さ (Tolerance for error)
- 6 少ない身体的努力 (Low physical effort)
- 7 接近や利用のためのサイズと空間 (Size and space for approach and use)

すなわち、ユニバーサルデザインとは、使う人に必要な情報がすぐわかること、使い方が簡単にわかって使えること、少ない力で効率的に使えることなど、あらゆる人にとって使いやすいデザインを意味する。この考え方とバリアフリーの考え方との違いは、バリアフリーは障がい为前提として、その困難を解消するための考え方であるのに対し、ユニバーサルデザインはできるだけ多くの人々が利用可能であるようなデザインにすることを基本コンセプトにし、全ての人を対象にした考え方であることである。

そこで、埼玉県立総合教育センター特別支援教育担当（2013）では、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を以下のように定義付けている。

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業とは、以下の2点を満たす授業である。

- ①特別な教育的ニーズのある児童生徒への指導・支援の中にある要素と、通常の学級で培った「どの子にもわかる授業」とされてきた要素を融合させた授業。
- ②その結果、児童生徒にとって「わかりやすく」、学習意欲が喚起される授業。

また、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業について、その要件・要点を整理し、ユニバーサルデザインの7原則に基づいた授業作りについて、長江・細渕（2005）は次のように構想した。

授業作りの観点で読み替えた「授業のユニバーサルデザインの7原則」

- 1 全ての児童が学びに参加できる授業
- 2 多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業
- 3 視覚や触覚に訴える教材・教具や環境設定が準備されている授業
- 4 欲しい情報がわかりやすく提供される授業
- 5 間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる授業
- 6 現実的に発揮することが可能な力で達成感が得られる授業
- 7 必要な学習活動に十分に取り組める課題設定がなされている授業

すなわち、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業とは、学習者にとってわかりやすい授業、学習者がわかる実感を持ち学習意欲が高まる授業、授業に取り組んだ教員の授業力が向上する授業ということになるだろう。

私は以上のようなユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業をいつも目指すように心がけている。では、なぜこのような優れた授業方法や考え方

を知り、授業実践で取り入れようとしたのか。それには以下に述べる理由があったからである。

2 大阪府立定時制高校の実態

私は2008（平成20）年4月大阪府立定時制高校に国語科の初任者教諭として赴任した。私は、高校での非常勤講師や常勤講師の経験もなく、いきなり初任者教諭として定時制高校の教育現場に立たなければならなかったのである。赴任前に私が持っていた定時制高校のイメージは、映画やドラマの中だけのものであり、夜間の定時制高校であったため、出勤が遅くて、夜に授業する学校だということぐらいしか考えていなかった。

私の赴任した高校は、1942（昭和17）年に設立され、定時制の課程は、その6年後の1948（昭和23）年に設置された。定時制の課程は、「働きながら学ぶ」普通科・単位制の学校で70年近い歴史と伝統があった。私鉄の駅前にある立地の良さから、生徒の大部分が、地元の東部大阪地域から通学していた。

勤務していた定時制高校は、社会のセーフティネットとしての役割を担い、生徒の年齢は15歳から70歳代まで幅広く、30歳以上の生徒が全体の1割ほどを占めていた。他校から転校・編入する生徒数も1割強在籍していた。高校卒業の資格は欲しいが、基礎学力や継続して学ぶ意欲・習慣が不足している生徒も多く、卒業するのは入学時の半分ほどしかいなかった。これまでの定時制高校に通う生徒の多くは、昼間にアルバイトや正社員等の仕事をしていることが多かったが、近年はアルバイト等の就労経験が無い生徒も年々増加していたため、ハローワークを活用したアルバイト指導や講話を行い、社会に出るための準備についても指導していた。また、基礎学力が就職決定に影響するため、生徒の学習意欲を高めるための取組が重要であった。

勤務していた定時制高校の生徒には、小学校や中学校に登校できなかった、いわゆる不登校の生徒や学校には行っていたが授業内容について行けずに授業を受けていなかった生徒、長く家で引きこもっていた生徒、他校から様々な理由で転校・編入してくる生徒など、学習から時間的にも、物理的

にも、心理的にも離れている生徒が数多く通っていた。これらの生徒に対しては、初めから知識注入型の高校内容の授業をしても授業について来られずに、授業を欠席したり、サボったりするばかりで学校から遠ざかってしまう。だから、1年生の段階では、これらの生徒に対しては、複数の教員で授業を担当するチームティーチング制を導入し、生徒全体の授業理解度を高め、授業へのつまづきを防いでいた。また、1クラスを一時的に2クラスに展開し、教員が少人数の生徒を対応する授業方法に変えていた。さらに、国語や数学、英語は週の半分の授業を高校の内容ではなく、小学校や中学校の内容を1年間かけてゆっくり復習するようにカリキュラムやシラバスが整備されており、1年間かけてようやく高校入試レベルまで学力を向上させようとしていた。さらに、勤務校での取り組みは、学力が低い生徒だけが恩恵を受けているだけではなく、学力が低くない生徒にも良い影響を与えていた。それは、基礎基本からもう一度やり直すことで、これからの勉強のつまづきを防止し、教師に対する授業中の質問が増えて授業が活性化し、ゆっくり学習する雰囲気作りができていたからである。今、大学でもリメディアル教育（Developmental Educationとも）が盛んになりつつあるが、定時制高校ではかなり前からそのような取組が行われていた。国語科のリメディアル教育の取り組みとしては、50音図から行った。それは、ひらがなは書けてもカタカナの50音図を完成させることができない生徒が多かったからである。他にも、漢字の成り立ちや部首、辞書のひき方等小学校の段階で習得しておかなければならないことまで高校1年生の早い段階で行った。また、復習の国語の時間だけではなく通常の授業においても常にリメディアル教育的な内容を意識していた。それは、「わかりやすい」授業にもつながっていく考え方であるからだ。授業中の生徒の反応を見ながら、どこまでどの方法で教えるかを瞬時に判断して、出したり引いたりしながら授業にレベルの強弱や高低を付けて行っていたのが現状であった。

3 授業実践

大阪府立定時制高校で教諭として国語科の教科指導、生徒指導、担任業務、校務分掌、クラブ活動の指導などを2008（平成20）年4月から8年間行った。生徒のためには今自分は何ができるか、を常に考え、自分の将来に向けて学習に取り組む生徒の支援と教育を行ってきた。

具体的には、国語総合、国語表現Ⅰ、現代文、国語演習、古文等の授業を担当してきた。常に授業で意識していたことは、「わかりやすい」授業とはどうあるべきか、ということである。「わかりやすい授業」を模索していく中で知ったのが、ユニバーサルデザインの授業方法と「授業のユニバーサルデザインの7原則」であった。勤務している高校は決して学力は高くはない生徒が多い環境であったが、まずは基礎基本を中心にしながらも、しかし授業内容のレベルは落とさないように教授方法を工夫したり、発問や説明する時の言葉に気を付けたりしながら日々授業を行った。例えば、プロジェクターを使って黒板に文字を投影して板書をすることで見やすくしたり、プリント学習をすることで板書の量を減らし、ノートを書くことよりも授業を聞きながら考える方に重点がおけるように配慮したりした。また、視覚的や聴覚的な情報を授業に取り入れることで授業の展開にリズム感を与え、生徒が45分間少しでも長く集中できるように授業の組み立てを考えた。その成果もあってか、毎年校内で行われた授業アンケートでは生徒から高い評価を得ることができた。また、高校を卒業するまでに「なぜ」と「～だから」をキーワードにして根拠を論じる論理的思考力や自分の思いを正確に伝える表現方法が身につくように国語科の授業の中で取り組むように心がけ、教室や授業の雰囲気も生徒が発言しやすいようなものに変えながら授業実践してきた。国語の能力は、思考に関わる全ての根底であるので、生徒が学びやすいように日々意識し、改善するように心がけた。

また、定時制高校の生徒指導の経験から教育には「受容」の精神が一番肝心である、と私は実感した。勤務していた高校には、教員に対して明らかに初めから敵意をむき出しにしていたり、無気力でやる気無く1日を過ごして

いたり、自信が無くいつも下を向いたりしている生徒が多かった。私はとりあえず、生徒を指導する場合には、生徒の話をまず聞くことから始めた。指導の前に生徒の話を聞き、生徒のことを理解することが生徒指導の根幹だと考えたからである。多くの生徒は自己肯定感が低く、様々な理由で自分に向き合っていない場合が多かった。「受容」のスタンスはとても効果的であった。

さらに、国語科や総合的な学習の時間でも生涯にわたって学び続けるために、また自己実現に役立てるために、自らの興味・関心を再発見する学習を行った。社会生活を充実させるために必要な国語表現の能力や伝え合う力、思考力を育成し、進んでそれらを利用して表現する力を養うことを目的とした。また、自分の身近なことを自らで調べて、解明していくことを中心とした学習活動を行い、自己肯定感や自己実現、キャリア教育の充実を図った。

2014(平成26)年4月からは、ベテラン教員と若手教員が協働できるように、私が若手のリーダーとして勤務校で初めて首席（他府県での主幹教諭）が内部昇格の形で配置され、退職するまで2年間、学校組織の機能の円滑化と他の教職員に対する必要な助言と指導を行った。その際の首席の役割は、人材育成（初任者の指導教員）・運営委員長（運営委員会の取りまとめ・連絡会の運営・全日制と定時制課程の調整）・進路指導部長（キャリア教育の推進）・各学年のHRの調整・授業改善の取組推進であった。具体的には、高等学校の初任者の校内研修を担当し、若手教員の育成並びに教員の資質向上のために校内研修を企画・実施した。また、進路指導主事（部長）として進路指導部を統括し、進路決定率を上昇させた。さらに、人権教育推進委員長として校内研修の企画と運営、生徒向けの人権教育の推進活動を行った。

4 授業実践から見てきたこと

大阪府立定時制高校で働きながら思ったことは、学習の積み重ねができていなかったり、学習に集中する環境が整っていなかったりする生徒の現実が、あまりにも厳しいということであった。その結果、自分の可能性にも希望が持てず、授業に興味を持って参加することができない生徒が多いと感じた。

そこで私が常に心掛けたことは、生徒への理解を深めることだった。それは、一つには、生活面についてであった。生徒や生徒たちを支える保護者が、今何が一番悩んでいるのか、どのようなことを問題に思っているのかを把握すること。そのためには、保護者や地域との連携は欠かせなかった。また、もう一つには、学習面についてであった。生徒が抱えている課題を把握するために、小・中学校の義務教育課程の中で、生徒たちがいつ、何を学ぶべきだったのか、どこでつまづいてしまったのかを知る必要があった。今、現実の学校現場、特に「教育困難校」と呼ばれる学校ではこのような生徒理解なくしては、教員の役割は果たせないと考える。

近年、普通科高校の進学校においてもある一定の割合で発達障がいの可能性のある生徒が在籍していることがわかってきた。文部科学省が2012（平成24）年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果では、約6.5パーセント程度の割合で通常の学級に在籍している可能性を示す、とされる。数字や漢字、アルファベットを文字として認識できない場合や縦書きが読めない場合、ホワイトボードのマジックの板書が見えない場合など、人それぞれ段階や程度が異なっている。このような生徒には個別対応していかなければならないが、多くは通常の授業で対応できることも少なくない。それぞれの学生の「困り」に気を付け、授業内容や方法を改善することで対処できることも多いからである。学力向上にだけ目を向けるのではなく、学力向上のための方法を考えることも重要な側面であると思う。授業のユニバーサルデザイン化は、特別な支援を必要としている生徒にも、そうでない生徒に対しても必要な考え方であり、有効な教授方法であると思う。すなわち、すべての生徒に対して「わかりやすい」授業を目指すということになるからである。私は今も常に授業のユニバーサルデザイン化を意識して授業改善を心がけている。

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の有効性は以下の3点である。

- ①多くの生徒にとってわかりやすい授業となる。
- ②生徒はわかる喜びを実感し、学習意欲の向上につながる。
- ③教員が取り組むことにより授業力向上と授業改善につながる。

また、この3点を行うことにより、特別な教育的ニーズを必要とする生徒の指導・支援につながることであると考える。

さらに、教員としてのスタンスは「受容」であると考え。なぜなら、生徒や保護者の声に耳を傾け、教育的ニーズを把握することが教員として大切な姿勢であるからである。そのようにすることで、生徒の自己肯定感の涵養と向上が生徒自らの自信につながり、その後の自分の進路や目標を決定する力へと変わっていくからである。そのためには、生徒をどんな小さなことでも誉める、スモールステップによる成功体験を増やすことで、やる気のない生徒をやる気にさせる方法を実践してきた。

5 おわりに

私の前任校での授業実践を「授業のユニバーサルデザイン」の視点から省察してきた。生徒にとって「わかりやすい授業」とは何か、どうしたら生徒に自分の授業に興味・関心を持ってもらえるのか、生徒のことをもっと知る方法はないのか、が定時制高校の国語科教員としての考えるきっかけであった。そして、自分の授業をできるだけユニバーサルデザイン化しようと心がけ、実践しようとしている。

私は関西外国語大学短期大学部で大学生を教えるようになってからも、授業のユニバーサルデザイン化を続け、常に心がけている。また、定時制高校の教員であった時と同じく、「受容」のスタンスでいようと思っている。大学生を相手にした時にも、これらの二つの指導方法は効果的であると考え。関西外国語大学の2年あるいは4年間の教育期間の中で、学生がさまざまに悩んだり、判断や解決方法を間違えたりすることもあると思う。私はそのように支援の必要な学生には、まずは寄り添って悩みや問題を聞き、学生が自分で課題や問題を解決し、克服する助けができるような学生指導をしていき

たい。また、私は普段から学生とは常にコミュニケーションを積極的に取り、問題解決や学生理解に役立てており、同僚の教員とも話し合いを通してお互いのことをわかり合い、共に働くための良い環境作りを心がけている。これらのことも引き続き継続して行い、学生や他の教職員の先生方とも共同・協同研究を行っていきたいと考えている。

確かに、専門的な知識や学問的な研究はもちろん大切だが、論理的思考力が身についていなければ、自ら考えたことを他者と共有することができない。ゆえに、授業を通じて、グローバル・コミュニケーション力を学生に身につけさせたい。そして、このグローバル・コミュニケーション力を身につけさせることにより、学問研究の基礎となる論理的思考力が磨かれ、他者に自分の意見や表現を発信し、意見交換が可能になると考える。これは、大学を卒業後、社会人として仕事をしたり、人と関わったりする上では必須の能力であるからだ。そのため、グローバル・コミュニケーション力を学生に身につけさせられるように授業や講義では、「授業のユニバーサルデザイン」や「言語活動の充実」した内容を積極的に取り入れている。高校教員時代には、古文や漢文の授業においては、プロジェクターとパワーポイントを毎回の授業で使用してICT化し、視覚的・聴覚的に学習者を刺激し、考えさせていた。また、生徒一人で、または複数人で考えさせ、互いに意見や考えを述べさせ合ったり、成果物を発表させあったりする授業を行っていたので、現在もこれらの内容を自分の授業や講義で日々さらに進化・深化させていきたいと考えている。

そして、国際的な社会人を目指す学生たちには、学生生活を通じて、「人間をみる目」を養ってほしいと考える。実際の現場で必要とされるのは、他者を理解する力、生き方を支える学びの場を提供する力である。その力は、周囲にいる人間をみるだけではなく、文学作品や芸能の中に生きる人間をみる姿勢がなければ培えない。私は、自分の経験と研究の手法を学生に伝えることで、国際的な社会で広い視野を持って活躍できる人材を育て、社会人になったその後を支えたいと考える。

最後に、教員として一番の役割は、授業を通して学生の人生を豊かにし、

生き方を支える学びの場を提供することだと考える。私が、歌謡や民俗芸能、国語科教育を研究する姿勢として大切にしてきたことは、ある時代や、特定の階層の人々の一点だけを捉えて結論を出すのではなく、歴史的な流れを俯瞰し、通時的に捉えることである。それは、他者に学問の真理を伝えるときの大きな強みとなった。教員が関わる学生の中には、将来、文化の継承者や担い手になる者がいるかもしれない。あるいは多くが、社会に出て生きる大人となる。学問の真理や魅力をどのように伝え、どのように学びにつなげられるかということを考えて教育活動に取り組むことで、学生ひとりひとりの生き方を支える一助につながると私は使命感を持って考えているからである。

【参考文献】

・ロナルド・メイス他（1997）「ユニバーサルデザインの7原則」（THE PRINCIPLES OF UNIVERSAL DESIGN Version 2.0）North Carolina State University, The Center for Universal Design.

https://www.ncsu.edu/ncsu/design/cud/pubs_p/docs/poster.pdf

・埼玉県立総合教育センター特別支援教育担当（2013）『平成24年度調査研究報告書第364号 小・中・高等学校及び特別支援学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究（最終報告）』

・長江清和・細渕富夫（2005）「小学校における授業のユニバーサルデザインの構想：知的障害児の発達を促すインクルーシブ教育の実現に向けて」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』54巻1号

・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」平成24年12月5日公表